

短 報

コロナ禍における「学士 看護展開論実習」 —病棟実習困難下にて、いかに臨床を伝えるか—

佐居 由美¹⁾ 西野 理英²⁾ 猪飼やす子¹⁾ 小布施未桂¹⁾
 縄 秀志¹⁾ 樋勝 彩子¹⁾ 鈴木 彩加¹⁾ 亀田 典宏¹⁾ 大谷優加子²⁾

Practical Report, 2020 [Methodology of Nursing] Practicum during the COVID-19 Pandemic: How to Convey Clinical Practice in Nursing?

Yumi SAKYO¹⁾ Rie NISHINO²⁾ Yasuko IGAI¹⁾ Mika OBUSE¹⁾ Hideshi NAWA¹⁾
 Ayako HIKATSU¹⁾ Ayaka SUZUKI¹⁾ Norihiro KAMEDA²⁾ Yukako OTANI²⁾

[Abstract]

In April 2020, our college cancelled practicums at clinical settings due to the COVID-19 pandemic. The practicum for the ABSN course in nursing, covering skills and processes, was to be performed using substitute methods. The practicum was performed in the training lab using a simulated patient (SP) with a case of chronic heart failure. For the purpose of a student studying clinical, teaching material was created in the form of animations in the sickroom of the training hospital, by consulting the ward nurse. The students' temperature was checked and conditions observed and reported daily. The SP and the student communicated while maintaining social distance. To avoid students contacting the SP's skin, for example, a foot bath was carried out on a mannequin. As precaution against COVID-19, some students participated virtually. After the practicum, a questionnaire was given to the students. From among 30 students, 19 replied and rated the practicum contents on a 10-point scale. As a result, "Using a simulated patient" received an average rating of 8.9, and "the animation teaching material of the sickroom" received a rating of 8.7. Some students commented that "Unlike in ward training, I was able to tackle the case-study thoroughly" and another said "I cannot have practicum in a ward as it is not easy." Since it is impossible to predict when the pandemic will end, it is important to consider this method as an alternative to clinical training.

[Key words] COVID-19 Pandemic, collaboration, practicum,
 accelerated bachelor of science in nursing program

[要 旨]

聖路加国際大学看護学部では、コロナ感染症の流行のため、2020年前期の実習科目の臨床での実習を取りやめた。「学士 看護展開論実習」においても代替方法を検討し、学内にて事例を用いて看護過程を展開するシミュレーション演習を実施した。臨床の実際を少しでも学生に伝えるため、病棟と協働し実習病棟の病室で動画教材を作成し、演習の事前学習に使用した。実習終了後、履修者にアンケートを実施した（回収率68%）。「シミュレーション演習」の平均点は10段階中8.9、「病室の動画教材」は8.7であった。「病棟

1) 聖路加国際大学大学院看護学研究科 St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science
 2) 聖路加国際病院看護部・St. Luke's International Hospital, Department of Nursing

実習と異なり、じっくり事例に取り組めた」「手技やコミュニケーションをもっと実践で行いたかった。」「病棟で実習出来なくて不安」などの自由記述があった。コロナの完全終息には時間が要すると思われる、本科目の方法の改善を含めた、実習代替え方法の検討が今後必要となると思われる。

〔キーワード〕 コロナ禍、協働、実習、学士編入制度

I. はじめに

2020年4月7日、コロナ感染症蔓延に伴う「緊急事態宣言」が、東京都を含む7都府県に政府より発令された。同日、聖路加国際大学は、2020年度前期の学部・の病院等で実施を予定していた臨地実習を、すべて遠隔授業または学内の演習に変更する旨、大学のホームページ等にて告知した。この決定に先立ち、前期授業開始は4月1日から5月11日に延期されており、学修支援システムmanabaを利用した在宅学習となること、対面授業への切り替えは新型コロナウイルス感染リスクを判断の上、決定することが決定していた。合わせて、2020年前期の授業を遠隔授業で実施することに伴う教育上の影響（看護技術の実践等）については、2020年度後期および次年度以降のカリキュラム全体で調整を行うこと、本学のディプロマポリシーに則り、学習者にとって不利益のないよう対応する旨¹⁾も大学HPに掲載された。実習科目「学士看護展開論実習」においても、臨地実習の代替の方法にて科目を実施したため、本稿において報告する。

II. 「学士看護展開論実習」概要

本科目は3年次学士編入3年生（以下、学士3年生）を対象とした2単位の実習科目であり、入学1年目の前期（7月）に実施される。学士3年生の前期の看護専門科目²⁾は、「からだの構造と機能、対象を理解し支援する方法について、事例を基盤に統合して学ぶ」統合科目と、「コミュニケーションの理論と方法」「個々の対象に応じた看護技術の活用」を学ぶ実習科目で構成されており、看護展開論実習は、これらの学習内容を活用し患者に看護を展開する前期最後の科目である。学生にとって、初めて1人の患者を担当する実習で、「患者にとって安全安楽な看護を、日常生活援助を行いながら、看護過程を用いて展開すること」を学習目的のひとつとしている。

III. 「学士看護展開論実習」の代替方法

学士編入担当教員2名と単位認定者の筆者の3名にて複数案を作成し、科目担当者間にて検討を重ねた結果、「模擬患者を活用したシミュレーション演習」と「オンラインシミュレーション教材vSim演習」を代替方法とし

て決定し、実習スケジュールを組んだ（表1）。本稿では「シミュレーション演習」を中心に報告する。

1. 模擬患者を活用したシミュレーション演習

シミュレーション演習は、昨年度、統合科目にて実施した統合演習²⁾を適用することとし、vSim演習および学修支援システムmanabaの活用を組み込み、実習目的を踏まえてスケジュールを再構成した（表1）。統合演習では慢性心不全の男性患者事例であったが、模擬患者の性別にあわせて女性とするなどの資料類を修正し、評価配分と評価基準を検討した。統合演習と同様にグループ（学生5～6名/1グループ）にて、看護過程を展開する演習とした。看護過程の各プロセスを事前課題とし、各学生がグループ演習当日の朝までにmanabaに提出する設定とした。模擬患者への実践は、グループ内の学生2名にて行った。昨年度の統合演習を本実習科目に適用できたことで、代替え方法の準備は一気に加速した。

2. オンラインシミュレーション教材vSim演習

上記に加え、学生に臨床に近い体験学習を提供するため、オンラインシミュレーション教材vSim for Nursing演習を導入した。vSimは、実践での看護の状況を再現する形で開発された双方向性のあるオンライン教材³⁾で、10事例の患者シナリオを有している。今回は、看護展開論実習にて担当することの多い疾患を6事例選び、うち1事例を学生に割当てた。各自がvSimで体験した内容を共有するため、学びの内容を発表する会を設けた。

IV. いかに臨床を伝えるか

3年次編入コースは2年間にて、看護師国家試験受験資格を得るコースである⁴⁾。“授業を遠隔授業で実施することに伴う教育上の影響（看護技術の実践等）については、2020年度後期および次年度以降のカリキュラム全体で調整を行うこと”が可能な年限も2年であるため、本科目では、病棟で実習を行えない学生に、いかに臨床を伝えるか、を最大限考慮し、今後の実習科目に資する体験ができるよう内容に工夫を凝らした。

1. 病棟との協働：病棟での動画教材の撮影

5月11日の2020年度前期開始より、一度も登校することなく在宅学習を行っている学生の状況を鑑み、病棟実

表1. 2020年度「学士 看護展開論実習」スケジュール

日	7月9日 2限	7月13日 4-5限	7月17日 実習1日目	7月18日 実習2日目	7月20日 実習4日目	7月21日 実習5日目	7月22日 実習6日目	7月27日
内容	オリエンテーション	ファーストラウンド動画視聴	情報収集	情報収集とアセスメント [模擬患者への実践]	看護問題の同定と計画立案	看護計画の実施 [模擬患者への実践]	まとめのカンファレンス	vSim発表／面談
マナバ提出物	なし	なし	8:30まで:個人版ヘルスアセスメント事前記録用紙 13:00まで:グループ版ヘルスアセスメント事前記録用紙	8:30まで:実習記録A. 1日の行動計画 ヘルスアセスメント事前記録用紙をもとに、学生2名で模擬患者から情報収集を行う	8:30まで:記録用紙1. アセスメント用紙& 2. 関連図 12:30まで:個人版記録用紙3. 看護計画の立案と評価(計画まで) 13:45まで:グループ版記録用紙3	学生2名で模擬患者に、記録用紙3にて立案した看護計画を実践する	8:30まで:記録用紙3(SOAP) 13:00まで:実習計画の実施グループ発表PPT提出	12:00までvSim個人発表PPT提出



写真1. 動画教材: 看護師のファーストラウンド



写真2. 動画: 病棟看護師からの応援メッセージ

習が少しでもイメージできるよう、実習病院である聖路加国際病院病棟での教材撮影を計画した。コロナ感染症患者受入れが継続していたが、病棟管理者の承諾を得ることができた。6月下旬、病室にて病棟看護師のファーストラウンドのシナリオを病棟看護師に実演してもらい撮影し、動画教材(約10分)が7月上旬に完成した(写真1)。この動画を視聴し、事例患者へのアセスメント項目と方法を列挙する課題を事前学習として学生に課した。

また、病棟看護師と学生とのコミュニケーションの一環として、病棟から学生へのメッセージ動画(写真2)、を撮影しmanabaに掲載した。合わせて、学生からの病棟へのお返しメッセージを募集し、後日病棟に届けた。

撮影した動画や写真の使用については、聖路加国際病院広報室のチェックを受け、個人のSNS掲載を含む目的

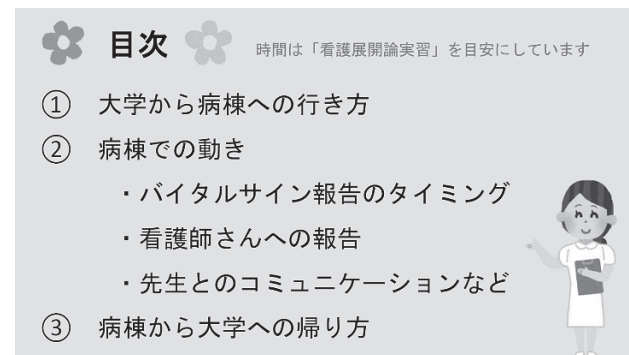


図1. LA作スライド「実習時の学生の1日」

外使用の禁止をmanabaに記載した。

2. 看護職の模擬患者の起用

臨床現場のリアリティを出すため、臨床経験のある看護職を模擬患者に起用した。2020年6月中旬のコロナ患者が再増加傾向にある時期に依頼したが、動画撮影及び演習に、既知の卒業生2名の協力を得ることができた。

3. 「実習時の看護学生の1日」スライドの作成

また、実習中の学生の1日を知ってもらうことを目的に、実習体験者の看護学部4年生のラーニングアシスタント⁵⁾(以下、LA)に、「看護学生の実習の1日」スライドの作成を依頼した(図1)。実習時に病棟に持参する持ち物やそれを置く場所、病室の体温計の場所など、学生が大学から病棟に行って帰ってくるまでが、学生目線で写真つきで説明されたスライドである。LAが実習時に参考にした文献についての情報も掲載され、学生が病棟実習をイメージし、次の実習科目への準備性が少しでも高まるような構成とした。スライドに用いた看護師の朝の申し送り風景や病室などの写真は、動画教材を作成した病棟の協力を得て撮影した。

Ⅲ. 学内演習における感染対策

学内演習においては、事前に十分な感染対策を講じた。

事前および毎日の体調を manaba の respon に提出することとし、希望者には、遠隔会議システム Google meet での出席を可とした（31名中希望6名）。来校時はマスク着用を義務付け、ディスポーザブル手袋を装着し演習を行った。多くの学生と接触する模擬患者にはフェイスシールドとマスクの装着を依頼した。アーツルームには3密回避のポスターを掲示し、模擬患者と学生がコミュニケーションをとるときはソーシャルディスタンスを保つよう、手指消毒を徹底するよう適時アナウンスを行った。学生が模擬患者の皮膚に接触することを避け、触診や足浴は人体モデルに実施した（写真3）。各グループのアーツルームへの出入りが重ならないよう、グループの模擬患者への実践と実践の間に「グループ入れ替え及び換気」時間を設けた。また、接触を避けるため、提出物はすべて manaba 提出とした。

Ⅳ. 学生による実習評価

実習後、本科目の改善を目的に履修学生を対象にウェブにて無記名アンケートを実施した。アンケート依頼は評価公開後に行い、単位認定者からの依頼による強制力を排除した。アンケートでは、看護展開論実習の内容について、10段階（1：全くよくなかった～10：非常に良かった）で問い、それらの理由について自由記述欄を設けた。履修者30名中19名より回答があり、各項目の平均は8.14（6.6～8.9）点であった。以下に、具体的内容を紹介する。「自由記述」末尾の（）内の数値は、自由記述を記載した学生の評点である。

最も高得点だったのが「模擬患者を活用したシミュレーション演習」で平均点8.9点であった。その理由として、「人と接することで、気づき、学び、考えるきっかけになった。模擬患者さんの反応やフィードバックは、大変参考になり、ありがたかった（10）」「実際に患者さんとお話できたことで臨場感があった（10）」「資料を読むだけでは体感できない気づきがありました（10）」「緊張感も体感できました（8）」などの【実際に人を相手にすることで新たな気づきや学びがあった（10名）】という病棟実習の疑似体験につながったことが推察されるコメントの他に、「グループワークだったことが大変やりやすかった（7）」「2人でなく一人でもやってみたい（5）」という記述もみられた。

次は、スライド「実習時の学生の1日」の8.8点で、「写真もあり実際にいったような気持ちになれた（10）」「とても具体的に説明されていてイメージがわかりました（10）」「写真を多用して分かりやすく、ポイントとなる情報を提



写真3. アーツルームでの実践
皮膚の接触を伴う実技はモデル人形に実施
遠隔出席者はPC経由でメンバーの実践を視聴

供してくれている。病棟までの道順、一日の流れから担当看護師さんに話しかけるタイミング、体温計の場所まで記載があり大変ありがたい資料だと思う（10）」「写真なども豊富で、実際に病棟に行かれた先輩方の生の声も生きていて非常に参考になったため（10）」といった【病棟実習のイメージ化に役立った（12件）】という内容の他、「実際に病棟実習をした訳ではなかったので参考程度にしかならなかった（5）」「実際行ったことがないので、本当に行けるか自信がない（7）」といった【イメージにはつながらなかった（3件）】という意見があった。

病棟と協働して作成した「看護師のファーストラウンド」動画の評価点の平均は8.7点であり、「実際の病棟、病室の様子を見ることができ大変参考になった。また病棟で実習している気分を味わうことができた。お忙しい中、学びのために撮影に協力してくださり、大変ありがたいと思っている（10）」といった【病棟実習のイメージ化に役立った（9名）】という回答の他、「看護師の動きは把握できたが、自分に何ができるのかイメージができなかった（5）」「看護師さんがどうしてその動きをしたのかわからない箇所もあり、本来だったら看護師さんに確認できるであろうところもあいまいに終わってしまった（9）」「やはり、実際に訪室して築地さん（模擬患者名）の状態を自分の目で見ると、息苦しさなどをより理解できたかもしれない（8）」という記述もみられた。

動画「病棟看護師からのメッセージ」は8.4点で、「実習へのやる気が出ました（10）」「温かいお言葉とても嬉しかったです。緊張感の高い現場で働く方々の姿を拝見でき身が引き締まりました（7）」「実習に行かずに、大学や病棟が遠く感じられていたが、このようなメッセージ動画があることで励みになった（10）」「実習に行けなかったことは残念でしたが、待っていて下さるのかなと思ったら嬉しく、病院への愛着がわきました（9）」「聖路加の学生であることを実感できたことと、実際の現場の看護師さんからメッセージを頂けたことで大変勇気づけられ、ありがたかった（10）」という肯定的コメント

表2. 病棟スタッフからのフィードバック

1. 動画の撮影に協力するに至った経緯
大学と病院が連携して学生の教育指導に当たるのが使命であり、ただでさえ病院の敷居は高いであろうと考え、少しでも病棟が身近に感じてもらえるとうれしいと思い、動画の撮影に協力しようと思った。以前に大学の先生方と一緒に「多重課題への対応」演習プログラム⁶⁾を作成しシミュレーション実習を行ったことを思い出し、学生さんが興味を持って実習ができるようになるとうれしいと思った。
2. 受け入れての感想
実際に病室を撮影用に設定されたところを見て、シナリオも患者の設定がわかりやすく、短い時間での看護でのかわりが伝わるようになっていたので、実践した看護師もやりやすかったようであった。酸素や（患者のスケジュールを記載する）ホワイトボード、ポータブルトイレなどの配置もリアリティーに富んでおり映像で伝わりやすかった。看護師経験のある模擬患者も演技とは思えないような息苦しさを表現していて、看護師役とのやり取りが実際の場面そのもののようで演技とは思えなかった。
3. 履修学生からのコメントを読んで
3年次編入3年生は、それぞれこれまでの経験の違いもあり、多様なコメントがあった。その中でも呼吸苦の患者に対する看護で具体的に優先順位の判断や自分だったらこうしたかもしれないなど、経験に合わせて考えてくれていることがわかり、この短い動画でもたくさんの学びが得られたのではないだろうかと思った。
4. 今後に向けて
現在、実際の臨床現場はCOVID-19で大変な状況とは言え、いつもの病棟とそれほど変わりはない現場を体感できるのに、と考える。せっかく廊下一つで行き来できる臨床現場があるにも関わらず、リアリティーに富んだ現場を体験することなく、時間が過ぎてしまうことの無念さ、この時間をどこで取り戻せるのかと臨床現場で働く者として、今後考えなければと感じている。病棟実習では、医療現場そのものの雰囲気を感じ、実際の患者がどのような不安や心配を持っているのか、など肌で感じられることが第一であり、なるべく早く臨床現場に学生が出られるよう願っている。

が10件あった。その他、「実際にはいつになったら病棟に行けるのかという気持ちが強まってしまった(6)」という内容も見られた。

「Web出席」は7.8点で「学校にこれない人もいるだろうし、感染が広がっていたため、あってよかったと思う(10)」という【コロナ感染状況を配慮した方法であった】という意見が5件、「通信障害などの関係でスムーズにグループワークが進められない時もあった(8)」という【通信環境が万全でなかった】というものが2件あった。また、「様々な事情があったとしてもグループワークにおいては大変やりにくさを感じた(3)」「特定の学生に負担がかからないような仕組み(時間毎にパソコン係をローテーションするなど)があればいいと思います(8)」という意見があった。

「vSim発表会」は7.6点であり、「自分で行うことともに、皆がどう体験し、どういう学びがあったのかということがとても良い学びでした。その二つあり学びが深まりました(10)」といった【学びになった(10名)】というコメントの他に、「ただの体験報告のようになり、患者も人によって違ったため、カンファレンスのようなこともできず、あまり意義を感じられなかった(4)」「やらなくていい(1)」という意見もあった。

通常の実習にて毎日作成する「実習記録A：1日の実習計画」の作成を実習2日目に課したが、アンケート結果は6.6点であった。「少しでも実習に近い事が出来た(10)」「一日をどのように過ごすのか、時間配分などを考えることができた(8)」といった【病棟実習に向けて役に立つ機会となった(5名)】といったコメントの他、「具体的な実習が全く想像できず、それでも想定して書きなさい、ということにあまり意義を感じることができなかった。これは実習が始まってからでも十分に書ける内

容であり今無理して書く必要はないと感じたため(2)」といった【課題の方法や意義の理解が困難であった(7名)】という意見や、「かなり病院にいける状態に近い実習なのだろうなと思ったが、本当だったら毎日作成するというので今回も毎日できればよかったかなと思った(7)」という記述もみられた。

「vSim演習」については、「演習目的に関連した学び/関連しない学びがあった」と19名中15名が回答した一方、6名が「看護展開論実習でvSim演習を実施しなくてよい」と回答した。その理由としては「情報収集と実施はあるけれど、アセスメント、評価がないため、それを看護展開論実習内で行う必然性は特にないと思います」等が意見として挙げられていた。

「看護展開論実習」全体に関する自由な意見としては、「グループによって、実習内容の説明やフォローの仕方に差があるように感じました」「個人ワークにさせていただいたかったです。グループワークは個人により負担が異なり、それでいてグループ評価になってしまうのは腑に落ちません」という指導やグループワーク方式に関する意見や、「vSimやるなら、実習の記録作成時間に余裕をもたせてほしかった」「もう少し、手技やコミュニケーションを実践で行いたかった」という内容についての要望、「例年に比べて学びがたりていだろうか……と心配です」「ただどこまでいってもやはり「演習」であり、自分たちがやったことを「実習」と呼べないなと思っています」といった実習科目が学内演習に変更になったことへの不安が見受けられた。その他、「実際では、1人の生徒に対し、1人の患者だと思うが今回の実習では、1人の患者にグループで取り組めたのでより深い学びになったと感じた」という意見もあった。

V. 病棟からのフィードバック

本科目における病棟との協働について振り返るため、2020年10月、病棟スタッフより、協働のプロセスについてのフィードバック（表2）を得た。

「大学と病院が連携して学生の教育指導に当たるのが使命」であり、「少しでも病棟が身近に感じてもらえる」よう動画の撮影に協力したこと、「設定されたシナリオがわかりやすく」「看護のかかわりが伝わるもの」で、動画は「リアリティーに富んだ映像」となっていたことがフィードバックされた。あわせて、「現場を（学生が）体験することなく、時間が過ぎてしまうことの無念さ、この時間をどこで取り戻せるのかと臨床現場で働く者として、今後考えなければと感じている」といった履修学生の今後に関する言及もあった。

聖路加国際大学と聖路加国際病院は2015年に法人が一体化⁷⁾され、看護教育における連携もより強固となった。今回、短期間にて実習場所で撮影した動画教材を準備できたことは、これまで積み重ねられた協力体制の賜物であり、法人一体化がもたらした強みが発揮されたものと考ええる。

VI. 今後に向けて

コロナ感染症の流行を受け、2020年度「学士 看護展開論」は、大学内にてシミュレーション演習を行った。病棟にて実習が出来ない状況を少しでも打破するため、「病棟で病棟看護師による看護場面の動画教材の作成」「シミュレーション演習」「実習の1日についてのスライド作成」など、履修学生が病棟での実習をイメージできるよう工夫し、病棟実習がすこしでも疑似体験できるよう配慮した。これらへの学生の評価は10段階中8.7ポイント以上と高値で、全項目の平均も8.14であったことから、今回の代替え方法は一定の評価を得たと捉えられよう。一方で、実習指導のグループ間による差異や内容についての意見も寄せられ、アンケート結果を踏まえた科目改善が必要であると考ええる。そして、自由記載には「学びが足りているのだろうかと心配」といった、病棟で実習ができなかったことへの学生の不安が散見された。コロナ感染症は終息の兆しが見えず、with コロナ生活が長期にわたり継続することが容易に想像でき、看護学生の病棟

実習は今後も制限されることが推察される。本学においてもニューノーマル時代の看護教育の在り方を検討することが喫緊の課題であり、法人一体化の強みを活かし病院との協働のもと、学生の卒業時の到達目標達成を担保するため、カリキュラム全体を見すえた検討が重要であると考ええる。

謝 辞

ご協力くださったすべての方々に深謝いたします。コロナ禍において何もかもが手探りの中、本実習科目が運営できたことは、皆様の看護基礎教育へのご理解ご協力あつてのことです。心より御礼申し上げます。加藤木真史先生、昨年度ご担当された統合演習をベースに本科目が実施できました。ありがとうございました。

引用文献

- 1) 2020年度前期授業（看護学研究科・看護学部）について [第4報：2020/4/20] [Internet]. <http://university.luke.ac.jp/news/2020/jgl9rh0000004hnm.html> [参照 2020-10-19]
- 2) 縄秀志, 加藤木真史, 佐居由美ほか. 学士編入統合カリキュラム（基礎看護学）の挑戦：ヘルスアセスメントの枠組みと事例を軸とした再統合. 聖路加国際大学紀要. 2020 ; 6 : 113-8.
- 3) vSim® for Nursing バーチャルシミュレーション [Internet]. <https://laerdal.com/jp/products/courses-learning/virtual-simulation/vsim-for-nursing/> [参照 2020-10-19]
- 4) 下田佳奈, 川端愛, 齋藤あやほか. 実践報告：聖路加国際大学第3年次学士編入制度一開始から半年間のプロセス. 聖路加国際大学紀要. 2018 ; 4 : 27-32.
- 5) 佐居由美, 中溝倫子, 高妻美樹ほか. 看護実習室整備に向けた取り組み：2018年度実習室調査結果報告. 聖路加国際大学紀要. 2019 ; 5 : 84-8.
- 6) 佐居由美, 松谷美和子, 三浦友理子ほか. 臨床－基礎教育の連携による演習プログラムの開発 ―多重課題, 時間切迫シミュレーション演習―. 聖路加国際大学紀要. 2017 ; 3 : 101-5.
- 7) 菱沼典子, 井部俊子, 柳橋礼子ほか. 看護学部の実習強化に向けた看護学部と病院看護部の協働のプロセス. 聖路加国際大学紀要. 2015 ; 1 : 66-70.